

通信制高校の新たな挑戦

N高等学校の教育内容と目指す人材像



N高等学校 校長
奥平博一

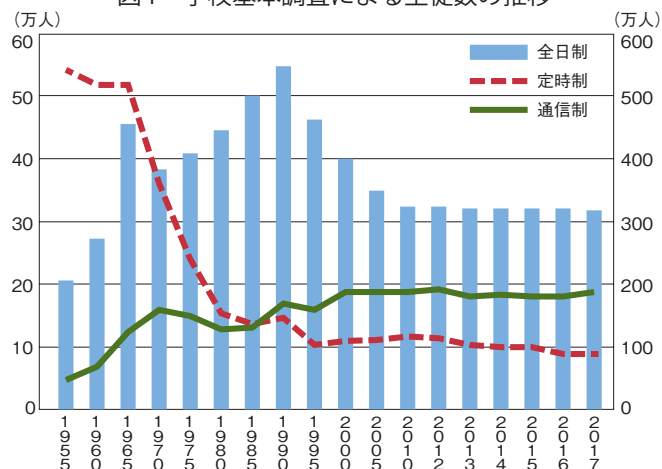
2020年教育改革をキーワードに教育界は新たな局面を迎えている。学習指導要領の改定や大学入試制度の大幅な見直しはその最たるものであり、各教育機関にはフレキシブルな対応と時代に即した変革が求められる。

少子高齢化によって子ども達の人口が減っていく昨今、教育の質に対する評価の比重が今後ますます高まってくると推測されるなかで、私達N高等学校が切り拓く“教育の新しいカタチ”は教育界に一体何をもちこたすのか。多様な個性を真正面から受け止め、どうすれば全ての子ども達が希望を持って活躍できるのかを、教育者の側も常に想像力を働かせて考えていかなければならない。

N高等学校設立の背景

常に変化する社会環境において、通信制高校が担う役割や責任は大きい。学校基本調査の統計データに目を向けると、その様相が見て取れる。2016年の調査結果によると全体の生徒数が年々減少しているなか、1990年のデータと比べて生徒数が増加しているのは全日制、定時制、通信制の3つの

図1 学校基本調査による生徒数の推移



(出所) 文部科学省「文部科学統計要覧(平成30年版)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1403130.htm

課程の内「通信制」だけなのである。その理由の一つとして考えられるのは「多様化する学びへのニーズ」への対応だ。

そもそも通信制課程は、全日制・定時制の高校に通学することができない青少年に対して、通信の方法により高校教育を受ける機会を与えるという趣旨のもと創設されたものであり、主に働きながら学ぶ勤労青年が教育を受ける場としての役割が大きかった。

しかし、時代の流れとともに社会情勢は大きく様変わりし、通信制課程に対するニーズにも変化が表れた。時間を有効に使いたい、好きなことを専門的に学びたい、研究や創作に没頭したいというように、子ども達の学びへのニーズ自体そのものが多様化してきているのだ。

通信制高校は、そんな多様な思考や個性を持つ生徒達を広く受け入れることができる。

2016年4月に開学したN高等学校は今年で3年目を迎え、ありがたいことに生徒数は7000名を超えるまでに増加した。通信制高校に対する根強いニーズを目の当たりにし、手応えを感じるとともに、教育機関としての責任の重大さを改めて実感している。

育成したい人材像

新しい学習指導要領では、何ができるようになるのかを明確化し、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の三つの柱によって子ども達の「生きる力」を育む学びに主眼が置かれている。単純な知識の蓄積ではなく、子ども達が自分で考えて表現するような主体的かつ対話的で深い学びについてクローズアップされているのだ。では、一体なぜこのような学びが重要視されているのか。それには世の中が孕む「不確実性」が大きく関わっている。

人生100年時代とも表現される現代において、産業構造の



N高等学校 伊計本校



入学式の様子



職業体験(刀鍛冶)の様子

変化や社会情勢の変化に適応していくということは、生きる上で必須とも言える能力である。つまり、変化の激しい予測困難な世界では、目の前で起こる変化にうろたえることなく突き進んでいく力が求められているのだ。これは、私達N高が目指している理想の人材像と近似している。

N高では「創造力」に重きを置き、教養、思考力、実践力の三つの要素を教育方針として掲げているが、ここで言う創造力とは単に新しいモノを生み出す力ではない。自由な発想で物事を捉え、主体的な考えで課題に挑戦する能力が重要なのである。

社会との関わりを深める学び

私達教育機関が子ども達に対してすべきことは無数にあるが、そのなかでも特に重要なのは社会との接点を作り、積極的に関わっていく機会の創出ではないだろうか。N高では、社会の課題を自らの行動で解決していく「プロジェクトN」や、現場の最前線で仕事について学ぶ「職業体験」等実践的な学びを重視したアクティブラーニング型のカリキュラムを多数用意している。このような新しいタイプの学習は、子ども達と社会との間に架け橋をつくり、互いが深く関わり合うことによって多様な考えを生む可能性を秘めている。そして、そのなかで社会課題を解決し、新しい価値が創造されれば社会に対しても正のインパクトが期待できる。これらは教科書学習のように知識の享受を主としているプログラムではなく、ある意味でゴールが存在しない。子ども達は、その時点で目指すべきマイルストーンを設定し、自分の考えに基づいて1つずつ課題を解決していく。だからこそ、歩みを止めることなく興味のある分野を徹底的に究めることができ、その過程であらゆるスキルを身につけていく深い学びが達成されるのである。教養や知識が得られるのは、何も教科書学習に限ったことではない。自分で考え、目的を持って行動することによって得る経験は、社会に出た後で必ず役に立つ。そして何より、

自らの興味が源泉となっている学びこそが、創造力を育むための重要な養分となり得るのである。

主体的で対話的な深い学びは、子ども達の考える力をより高い次元まで引き上げる可能性を有しており、そこに限界はない。2018年2月に発足した「N高起業部」は、先述のプロジェクト学習「プロジェクトN」がより高次元で発展したものであり、高校生のうちに「起業」に取り組むという新たな挑戦でもある。

情報技術の発達で、欲しい情報は誰でも手に入るようになり、年齢や世代によって得られる情報の質そのものにほとんど差はなくなってきている。これまで当たり前のように存在していた「高校生だから」という足かせは現代においてもはや必要ない。誰もが自分の好きな道で輝ける。そんな未来はもう近くまで来ている。

多様性の受容

今後は多くの業界で「多様性」というキーワードがますます重要な意味を持つのではないかと考えている。これは裏を返せば、多様性に目を向けなければさらなる発展が望めないということでもある。一人ひとりの個性や考え方、教育機関そのもののあり方、これら全てにおいて多様性を認めることが教育の可能性を広げる最適解ではないだろうか。

子ども達には多様な価値観を持って何事にも果敢に挑戦するクセをつけてほしい。そして、子ども達の未来を切り拓くためにしてあげられる最善のことは何か。教育者は常に自問し、実行し続けなければならない。

子ども達が高校生として学べる期間は限られている。大学を始めとする高等教育機関には、高校在学中に生徒達が磨き上げた得意分野をさらに伸ばすような教育の仕組みや環境の構築が期待される。N高を巣立っていく生徒達が、一段階上のレイヤーでも人や社会と密接に繋がり、より自分らしく輝ける人材になることを願っている。